

Sat., Mar.14 2026 / 12:30 ~ 16:30 / ¥6,000 (¥2,000 for 25 years old or younger)

YASHIMA

A priest and companions from the capital come to Yashima Bay in Shikoku, a famous battle site between the Minamoto and the Taira clans. They ask two fishermen for a night-lodging at their hut. Upon the request, the old fisherman describes the severe winning battle led by Yoshitsune of the Minamoto clan. It is so detailed that the priest wonders who the old fisherman is. Suggesting himself as the ghost of Yoshitsune, the old fisherman and his fellow disappear. In the dream of the priest, the ghost in armor reappears, suffering from the life of fighting and killing in the hell even after his death. He emphasizes how honorable the incident of retrieving his dropped bow was in the peril of his life. He shows the furious battle scenes on the sea until dawn.

TOBIKOE

A man and a new monk are on their way to a tea ceremony. They come across a river with no bridge. The man jumps across the river easily but the monk is too timid to do. The monk tries, but he cannot jump. Finally, the man takes the monk's hand and jump together. The monk, however, finds himself in the middle of the river all drenched. The man cannot stop laughing at it. Offended, the monk brings up an old incident in which the man was miserably defeated in a *sumo* wrestling match and laughs aloud. The angry man challenges him a wrestling match and wins. The monk objects to the result and chases after the man.

KAKITSUBATA

A priest on the way to the east stops at Yatsuhashi in the Mikawa province where irises or *kakitsubata* are in full bloom. Quoting the *Tales of Ise*, a woman there explains a poem by Ariwara no Narihira. He used five syllables of *ka-ki-ts-u-ba-ta* at the beginning of each line in the poem. She then offers the priest a night-lodging and later appears in a gorgeous robe which Narihira mentioned in the poem and is a memento of one of his lovers. She reveals herself as a spirit of irises immortalized by Narihira's poem and dances in gratitude of resting in peace.

<TYoshikawa/STakahashi>

●お申し込みは出演能楽師、または金春円満井会までどうぞ。

●上演中の無断撮影、録音、録画は固くお断り申し上げます。

●出演者、曲目は都合により変更される場合があります。
あらかじめご了承ください。

<主催>

公益社団法人 金春円満井会
komparu-emmaikai

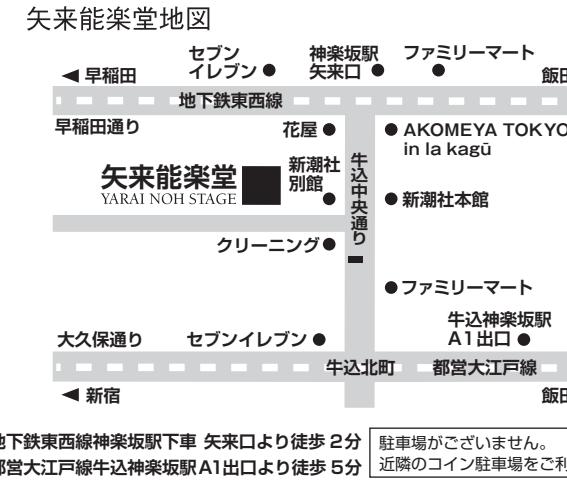
〒167-0042

東京都杉並区西荻北 2-27-7 アルファ西荻窪 2F

電話 03-6913-6714 FAX 03-6913-6775

ホームページアドレス

<https://www.komparu-emmaikai.com/>



地下鉄東西線神楽坂駅下車 矢来口より徒歩 2分
都営大江戸線牛込神楽坂駅A1出口より徒歩 5分
駐車場がございません。
近隣のコイン駐車場をご利用ください。

八島 (やしま)

春、四国をめざす都方の僧 (ワキ) が讃岐国八島の浦に立ち寄る。

日が暮れ、海人の塩屋で宿を借りようと待つと、塩屋の主である老翁 (前シテ) と海士 (ツレ) が釣竿を携え帰宅する。塩屋の主は屋の内の見苦しきゆえ宿は叶うまじと断ろうとするが、僧が都よりの者と知るといいたわしく思い、宿を貸すことにする。

僧が八島の浦での源平の軍事行動を所望すると、主は古い者から聴いたとしながら、源氏の大将・義経の堂々たる出で立ち、悪七兵衛景清の鉢引き、佐藤継信、菊王の討ち死などについてありありと語る。

あまりの話の詳しさを不審に思い僧が名を訊ねると、曉には名乗ろう、しかしたとえ名乗るまいと夢を覚ましてくれるなり、と言い残して主は姿を消す (中入)。

僧が浦に枕し夢を待つと、義経の靈 (後シテ) が甲冑を帯して現われ、八島の浦への執心の去り難さを述べる。そして昔の春の戦において、海にとり落とした弓を命を顧みずに拾い上げんとした際の思いなどを語って激しい合戦の有様を見せるうちに夜が明け、敵と見えていたものは群れ入る鷦、鷯の声と聞こえていたのは浦風なのであった。

《田村》、《簾》とならぶ勝修羅の能です。下掛りではツレ (海士) が最後まで舞台に残ります。

稽古をしていて、「夢」という言葉が非常に多く出てくるのが印象的でした。

(岩松)

杜若 (かきつばた)

春が過ぎ夏が来るころ、一人の旅僧 (ワキ) が都から東国へ向かう途中で三河の国・八橋を通りかかる。沢辺に咲く杜若を眺めていたところ、一人の女 (シテ) があらわれる。女は、この地が八橋と呼ばれる由来は伊勢物語の「水ゆく川が蜘蛛手になっているので橋を八つ渡した」という文にあることを述べ、在原業平がこの『かきつばた』の五文字を句の頭に置いて旅の心を詠んだ「唐ころも 着つつ慣れにし 妻あれば はるばる来ぬる 旅をしそ思う」という歌を紹介する。そして、自らの庵で一夜を明かすよう僧に勧める。

先ほどの女が在原業平の形見の冠と衣を着用して再度あらわれ、僧がその正体を問うと、自身は杜若の精であると答える。そして、在原業平が歌舞の菩薩の化現であり、その言葉ひとつひとつが衆生済度を説くのだと話す。さらに、伊勢物語に描かれる在原業平の東下りのことを語り、在原業平が数々の女を救ってきた様を旅人に説く。女は舞を舞い、自身も草木國土悉皆成仏の御法を得て、成仏する。

杜若の精の視点から見た、在原業平の魅力が存分に詰まった演目です。その魅力を皆様にお伝えできるように勤めたいと思います。

「定例能入場券」「カレンダー」「金春月報」などご希望の方は
インターネットからもご購入頂くことが出来ます。



※上記 QR からどうぞ。

<https://ws.formzu.net/fgen/S38826101/>

(公社) 金春円満井会 法人化40周年記念寄付金 募集

皆様のおかげで、金春円満井会は法人化40周年を迎えます。1口3,000円から受け付けており、2口以上のご寄付を賜りました方には、特典もございます。

金春流能楽という伝統を後世に伝えていくために皆様のご協力とご支援を仰ぎたく、お願い申し上げます。

<https://forms.gle/zeWwYaLfvKDziJ247>

※上記 QR からどうぞ。

※上記 QR からどうぞ。

